社会主義はいつでも可能である

～レーニン「帝国主義と社会主義の分裂」について

茂木 康（ルネサンス研究所・関西）

2022年1月29日

高槻市立生涯学習センター第3会議室

(1) ロシア革命（1917年）の評価

① 現代史の起点としてロシア革命

② ロシア革命とレーニン

「4月テーゼ」の評価

③ 池田嘉郎『ロシア革命 破局の8か月』（岩波新書 2017年）

- ・なぜ臨時政府は失敗したのか
- ・なぜボリシェヴィキは成功したのか
- ・「公衆」＝臨時政府 vs. 「民主勢力」＝ボリシェヴィキ
- ・臨時政府がめざしたもの → 言論の自由、人身の不可侵、私的所有権など
「西欧諸国がともかく備えていたものをロシアにも備えよう」という試み
「『破局の8か月』によって失われたものが、ロシア史に深い痕跡を残したこともたしかである。私的所有権が社会に根をおろし、各社会層の経済的利害が諸政党によって議会で調整され、そうした制度のなかで言論の自由や人身の不可侵も、より実態をもつ。こうしたことの模索は、今日のロシアでもなお続いているのだ」
- ・（結論）「1917年のロシア革命が私たちに伝えるのは単純なことである。人は互いに譲りながら、あい異なる利害を調整できる制度を粘り強くつくっていくしかないのだ」

(2) 「帝国主義と社会主義の分裂」（1916年10月）

- ・なぜ「帝国主義から社会主義へ」ではなく、「帝国主義と社会主義の分裂」なのか
- ・ヨーロッパの社会民主主義運動の分裂
- ・日和見主義・社会帝国主義・社会排外主義 vs. 革命的社会民主主義
→ 日和見主義的潮流＝帝国主義の超過利潤によって買収されたブルジョア的労働者党。これらにたいして「全線にわたって断固たる、容赦ない闘争をおこなわずには、帝国主義との闘争も、マルクス主義も、社会主義的労働運動

も、問題になりえない」

「日和見主義との分裂が避けられず必要であるということをおもに大衆に説明すること、日和見主義との容赦ない闘争によって大衆を革命へ訓練すること、国権的自由主義的な労働者政治のあらゆる醜行を隠蔽するためでなくそれを暴露するために、戦争の経験を利用すること—これが、世界の労働運動における唯一のマルクス主義的方针である」(大月版レーニン全集 23 巻 p128~129)

・社会民主主義運動の分裂=世界史を左右する大事件、社会主義の命運は革命的社會民主主義派の實踐にかかっている

→ 当時、レーニンの主張に賛同した社会主義者は極少数派にすぎなかった。こうしたレーニンの「観念」と「判断力」はどこから生み出されたのか

(3) 1914 年のカタストロフと「哲学ノート」

① 「レーニン主義という出来事」(スラヴォイ・ジジェク)

「1914 年のショックは、アラン・バディウの表現を借りれば、一つの災厄だった。まさにそれは世界が消滅するカタストロフだった。進歩へのブルジョア的な牧歌的信仰だけでなく、そうした進歩と連んできた社会主義運動もまた、同様の災厄に圧倒された。レーニン自身(『何をなすべきか』のレーニンということだが)も、足許から大地が崩れ去る思いを味わった。… このカタストロフが、レーニン主義という出来事、第 2 インタの痼疾だった進歩主義史観にもとづく歴史主義を打ち砕くための道を切り拓いた。… こうした絶望の時を凌ぎ、ヘーゲル『大論理学』の精読をつうじて一回限りの革命的好機を感じとることができたレーニン、このレーニンが、まさにここで生まれた」(スラヴォイ・ジジェク『迫り来る革命 レーニンを繰り返す』長原豊訳 岩波書店 2005 年 p3)

② 第 3 インタナショナルのよびかけ (1914 年 11 月 1 日)

・「日和見主義にうちまかされた第 2 インタナショナルは、死滅した。日和見主義を打倒せよ。『投降者』はもとより、日和見主義をも一掃した第 3 インタナショナル万歳」(1914 年 11 月 1 日付「ソツィアル・デモクラート」*1)

・新たな世界党結成にはまだまだハードルがあることを自覚し、主体的な準備が不十分性であることを冷静に分析していたレーニンは、すでに弁証法の研究に取り組んだ。またこのあと『帝国主義論』の準備を進めた → 『哲学ノート』『帝国主義論ノート』

③ 「ベルンノート」(ヘーゲル『大論理学』の精読 1914 年 9 月~12 月)の背景

※張一平『レーニンへ帰れ』(中野英夫訳、世界書院 2016 年)

1. 当時レーニンは『グラナート百科事典』からマルクスにかんする文章を依頼されており、そのためにマルクスの弁証法を専門的に紹介しなければならなかった → 「カール・マルクス」

2. 第 2 インタの社会民主主義者たちが、自分たちの日和見主義的行為と帝国主義戦争を弁護する理論的根拠に「弁証法」を持ちだしていた

3. 当時のレーニン、プレハーノフ流のマルクス主義哲学（哲学的唯物論）の影響下にあったため、ロシアにおけるプロレタリア革命を推進するための理論的な根拠を得ることができなかった。（機械的唯物論、地理環境決定論、歴史弁証法の無理解）

「これから行おうとしているヘーゲル哲学の学習と研究の中で、レーニン自身が、マルクス主義哲学の本質についてのプレハーノフ流の仮性の擬似像と閉じた理論回路を打ち破り、マルクスの史的唯物論の歴史的实践的弁証法を真の意味で獲得し、しかも、それが、彼が指導した偉大なる 10 月革命の重要な思想的武器となったことは、このときのレーニンは、まだ直接気づいていなかった」(*2)

(4) 哲学的唯物論から実践的弁証法へ

① 哲学的唯物論からのアプローチ

レーニンは『大論理学』に取りかかるにあたって、「ヘーゲル観念論の唯物論的なひっくり返し」として読むという姿勢で臨んだ。これは、「人間の社会的存在および社会的実践能力はその外的諸条件（自然の諸法則）によって規定されており、そうした客観的法則を実体化し、絶対的なものと見る」という哲学的唯物論の立場からヘーゲルを読解しようとしたのである。当然のことながらこのようなアプローチは見事に破産する。

② 歴史的实践的弁証法への接近

・「人間の目的」「技術」が「実践を通じて自然を変え、新たな社会的存在の基礎を獲得する」というマルクスが史的唯物論によって開いた新たな世界観への理解

・「個人の意志によっては動かすことができない社会歴史の法則も、また人間の能動的活動が作り上げたもの」であり、「共産主義という『自由の王国』」にあっては、この人間の意志によっては動かすことができない「外的必然性」（「見えざる手」が出現する経済法則）は必ず乗り越えられるべきものである → マルクスの思想的核心に接近しつつあった (*3)

③ 党派闘争による偏向

・レーニンの第一の目的は、カウツキーを領袖とする第 2 インタナショナルの日和見主義潮流との党派闘争にあった。レーニンにとっては「第 2 インタの崩壊が一時的なものにすぎず、戦争が終ればすべて正常に戻るだろう」(*4) という考えは断じて受け入れ難かった。

「ヨーロッパ戦争が、いろいろな民族の何億という人々のまえに、問題をつぎのように実にはっきり提起して、人類に巨大な貢献をしたことを、みとめないわけにはいかない。すなわち、『自国』のブルジョアジーの大国的な、一般に民族的な特権あるいは優越あるいは野望を、銃あるいはペンにより、直接または間接に、どんな形態でも、擁護するか。そうなれば、これは、自国ブルジョアジーの味方か従僕となることを意味している。それとも、国際的に連帯しているプロレタリアートの革命的行動によってあらゆる政府、なによりもまず、自国の政府を暴露し、打倒するために、大国的な特権をめざすあらゆる闘争—とくに武力闘争—を利用するか。そこには中間の道はないのである。いいかえれば、中間の立場をとろうとする試みは、実際には帝国主義ブルジョアジーのがわにひそかにうつることを意味する」（「イタリアにおける帝国主義と社会主義の分裂」1915年、全集21巻373頁）

・帝国主義ブルジョアジーの下僕か、プロレタリアートの革命的行動か。中間はない。中間の立場を取ろうとするものはすべて帝国主義ブルジョアジーの手先という論理

→現実はその単純ではなかった

・当時のヨーロッパでもっとも民主主義が進んでいた英・仏ともっとも遅れたロシアが手を組んで、中間に位置していたドイツと開戦するというねじれた構図が、独・仏それぞれの社会主義者たちの態度に大きく影響し、自国政府支持を余儀なくさせた（新田滋 *5）

・レーニンらは日和見主義が発生した経済的根拠を帝国主義がその超過利潤によって労働貴族を買収したことに求めているが、それでは「どの階層が『賄賂を受けたか』という問題が起こる … 最高給を受けているグループだけであろうか。それでは全運動が『裏切り者』として行動したわけを説明できない」（ボルケナウ *6）のである。

・ブルジョア支配の「障地」としての市民社会

市民社会（民主主義）が発達した英・仏・独に比して、市民社会の形成が未熟であったロシアの社会主義者たちは祖国敗北主義の立場を表明することが容易であった

(5) 帝国主義戦争を内乱へ

① 第2インタの総括と来るべき第3インタの任務

「第2インタナショナルは、19世紀の最後の3分の1と20世紀初めの、苛酷きわまる資本主義的奴隷制と急速な資本主義的進歩との、長期にわたる『平和な』時代に、プロレタリア大衆をあらかじめ組織するための有用な準備活動で、自分の使命を果たした。第3インタナショナルは、資本家政府を革命的に

襲撃するため、政治権力をめざし、社会主義の勝利をめざして、あらゆる国のブルジョアジーにたいして内乱を起こすために、プロレタリアートの勢力を組織するという任務に直面しているのだ！」（「社会主義インタナショナルの現状と任務」全集 21 巻 p27～28）

② 世界を変革するのはプロレタリアートの革命的行動（一斉武装蜂起）以外にない

「すなわち、世界は人間を満足させず、そして人間は自己の行為によって世界を変えようと決心する、ということである／核心：“善なるもの、は”外的現実性の要求、である。すなわち、“善なるもの、とは人間の実践＝要求（一）と外的現実性（二）であるということである」（*7）

第3インタとは何か。それを一言でいえば「帝国主義戦争を内乱へ」につきる。そのことを理論づけるために『帝国主義論』を書かなければならなかった。そこで証明しようとしたのは、帝国主義が資本主義の最高の発展段階であるのみならず、腐朽せる資本主義であり、死滅しつつある資本主義であるということだった。その腐朽性と死滅性を社会主義へと転化とする契機は何かといえば、帝国主義戦争の不可避性ということになる。

→ 「超帝国主義論」にたいする徹底的批判

(6) 社会排外主義者の「帝国主義段階」論

① ハインリッヒ・クノー

・クノー ドイツ社会民主党（SPD）右派の代表的論客。レーニンは「第2インタナショナルの崩壊」や「帝国主義論」などで度々批判

・クノー「党の崩壊か」

「帝国主義とは社会主義に導く資本主義の発展行程における必然的な段階」と規定し、SPD 左派の「帝国主義を成長させる必要はないし、これを根絶させなければならない！」という主張は、「機械制工業のその初期」に「機械を打ち壊して、手工業に引き戻す」というのと同じ「たわごと」と主張。（*8）

このようにカルテルやトラスト、シンジケートによって資本主義が経済を組織し、その無計画性を除去し、「あたかもたんに一組の役人を他の組によっておきかえるように、労働者が資本主義を『のっとる』ことをいっそう容易にしつつある」（*9）という見方は、当時の社会主義者の中では珍しいことではなかった。

クノーは帝国主義とは「まさに発展の結実したのものとしてその形態ならび生命」を獲得したものであり、「歴史的に必然的なもの」であると主張した。だから、個々人にとってその発展方向が好ましいかどうか、それが個々人の道德観にかなっているかどうか、あるいはそれが戦争を引き起こす原因となるかどうか

かといった問題を「その発展行程の歴史的制約性ならびに必然性とは全く無縁なことがら」(*10)として斥けた。

② シュルツェ・ゲーヴァニッツ

1864年生まれのドイツの社会学者で、第一次大戦中は戦時計画経済にかかわって、原料供給部門と金融部門を共同経済的に組織化し、国家の統制下におくべしと主張。SPDを戦時経済に協力するように努力した仲介者(*11)

「われわれのすでにみた諸傾向の発展を究極まで考えぬくならば、国民の投下資本は有価証券の形に鑄こまれることになる。そのときにはサン・シモンのつぎのような天才的なことばが実現される。『経済的諸関係が統一的規制なしに展開される、という事実に対応する今日の生産の無政府状態は、生産の組織化に席をゆずらなければならない。生産を指導するは、相互に独立していて、人々の経済的欲望を知らない、孤立した企業家ではなくなるであろう。この仕事は社会的機関の手に帰属することとなるであろう。より高い見地から社会経済の広い領域を見わたすことのできる中央管理委員会が、社会経済を全社会にとって有利なように規制し、生産手段をこれに適当した人の手にゆだね、とくに生産と消費とのあいだの不断の調和について配慮するであろう。経済活動の特定の組織化をその任務のうちにとりいれている機関がある。すなわち、それは銀行である』。サン・シモンのことばの実現までには、まだまだ遠い。だが、われわれはすでにその実現の途上にある。これは、マルクス自身考えたのとはちがった—といっても形態の点だけがちがった—マルクス主義である」(レーニン『帝国主義論』宇高基輔訳 岩波文庫 1956年 p206)

(7) カウツキーのクノー批判

① クノーの「歴史的必然性」を批判

カウツキーは、クノーの歴史的必然性なるものは、単に帝国主義がそこにあるということしか意味していないと反駁する。そして問題は「帝国主義が未来においても必然的であるかどうか」なのだとする。クノーの「必然性」は、マルクス以前の哲学の立場である。そして「哲学者は世界をさまざまに解釈するにすぎない。だが重要なことは、それを変革することだ」というフォイエルバッハ・テーゼを引いて次のように述べる。

「人は過去と未来の両世界の限界線、すなわち現在を生きるばかりでなく、またつねにこの二つの世界を生きているものなのである。人は単に認識する個体であるにとどまらず、同時に行動する個体でもある。彼は欲すると欲しないとにかかわらず行動しなければならないのだ」(カール・カウツキー『帝国主義論』波多野真訳 創元文庫 1953年 p55)

「だがこのことを実行するにあたっては、現に存在するものすべてが必然的

であるといった単なる確信は全然役に立たない。この場合、その課題はむしろなにが彼にとって必然的なものであり、あるいはまたそうでないかということ、そして結局はなにが（彼にとって）有害なものであるかを発見するにある」（※カウツキー『前掲書』p56）

② カウツキーの超帝国主義論

- ・カウツキーは帝国主義が資本主義の新たな段階であることを認めず、それは一つの政策にすぎないと主張した。彼にとっては「超帝国主義」という政策もとりうるということ

- ・当時のイギリス帝国主義の例をあげて、帝国主義とは「近代化した重商主義」と主張

→ 完全な誤り。同じイギリスを分析して、ホブソンは、イギリスが19世紀末から急激に植民地を拡大しているのは、従来の植民地政策とは全く違う「新帝国主義」と規定。ただし、ホブソンもカウツキーと同じくそれは「段階」ではなく「政策」とみた。

③ 社会主義者たちの帝国主義にたいする立ち位置とそのねじれ

- ・帝国主義とは「政策」に過ぎず、社会主義はまだまだ先のことだと考えていたカウツキーやホブソンは、帝国主義を批判

- ・帝国主義は社会主義前夜の「段階」とみたクノーは帝国主義を擁護

- ・かくのごく、当時の社会主義者たちの帝国主義にたいする立ち位置は一筋縄ではいかないものであった。

④ レーニンによる社会排外主義者との差別化

- ・クノーは帝国主義が発展していけば、自然と社会主義にいたるといふ。これがありそうにもないし、またとてつもなく反動的なことであるのは、カウツキーが批判したとおりだ。

- ・それではレーニンはどうか。

「われわれの目の前にあるものは生産の社会化であって、決してたんなる『からみあい』ではないこと、私経済的および私有者的諸関係は、もはやその内容に照応しなくなっている外皮であって、この外皮は、その除去が人為的に引き延ばされるばあいには不可避免的に腐敗せざるをえないものであり、また、比較的長いあいだこの腐敗状態をつづけることがありうる（不幸にして日和見主義の腫物の治療が長引くようなばあいには）にしても、しかし結局はかならず除去されるであろうと言うこと、が明白となるのである」（レーニン『前掲書』p205）

- ・私的所有にもとづく資本主義的生産関係という外皮と、発展によって社会化された生産力との衝突 → 外皮は破碎されなくてはならない。それは社会主義的へと置き換わらなければならない。それを引き延ばしているのは日和見主義

という「腫物」である

⑤ ロシア2月革命の破壊力

・「生産力と生産関係の矛盾」の導入によるクノーとの差別化

→ だが、資本主義は生産関係という外皮を拡大し続けてきたのではないか。「生産の社会化」とはまさに外皮の拡大のことではないのか。だとすればその衝突はいつ起こるのか。どうしてそれが、「今だ」と言えるのか。戦争が終れば資本主義が新たな外皮（たとえば「超帝国主義」！）を獲得する可能性はゼロだと言えるのか。もしも外皮が拡大を続けていくなれば、社会主義の未来は永遠の彼方へと追いやられてしまうのではないか。このような難問が次々と現われてくるのだ。

だから、「生産力と生産関係の矛盾」という発展の弁証法を持ち込んでも何の解決にもならなかった。問題となっていたのは、発展の弁証法そのものを爆砕することだった。そしてそれは起こった。ロシア2月革命である。

(8) 戦時統制経済と社会主義

① 4月テーゼ

2月革命はレーニンの中で、それまで彼が積み上げてきた一切切切をスパークさせた。そして一瞬にして全く新しい世界を作り上げていた。

「8. われわれの直接の任務は、社会主義を『導入』することではなく、社会的生産と生産物の分配にたいする労働者代表ソヴェトの統制にいますぐうつることにすぎない」（全集24巻「現在の革命におけるプロレタリアートの任務について」p6）

・「社会主義を『導入』することではない」 → 「時期尚早論」に対する最もラディカルな回答

・社会主義は目の前にある。あとは、それをしっかりとつかんで、実行に移すだけだった。つまりプロレタリアート（労働者代表ソヴェト）による経済統制である。

・（戦時経済統制）「戦時国家独占資本主義であり、…労働者にたいする軍事的苦役、資本家の利潤にたいする軍事的保護」 → 「真に革命的民主主義的な国家のもとでは、国家独占資本主義が、不可避的に社会主義に向かっての一步あるいは数歩を意味する」（*12）ものへと転化する。

② 「さしせまる破局、それとどうたたかうか」

「戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化を異常にはやめ、それによって、人類を社会主義にむかって、異常に近づけたが、これこそ歴史の弁証法である」（全集25巻「さしせまる破局、それとどうたたかうか」p368）

・社会主義への一步を踏み出すためにはどうすればいいのか → 国家独占資

本主義の性格を規定している「国家」をプロレタリアートの国家に転化するだけでよい。それを成し遂げるのはプロレタリアートの革命的行動（一斉武装蜂起） がいがない

「なぜなら、社会主義は、国家資本主義的独占からの、つぎの一步前進にほかならないからである。いいかえれば、社会主義とは、全人民の利益をめざすようになった、そしてそのかぎりでは資本主義的独占ではなくなった、国家独占資本主義的独占にほかならないのである。／そこには、中間はない。客観的な発展の行程は、つぎのようなものである。すなわち、社会主義にむかって進まないでは、独占体（戦争はその数と役割を 10 倍にもした）から先へすすむことはできない」（全集 25 巻 p385）

③ 10月革命はまぎれもない社会主義革命であった

帝国主義戦争の硝煙の中から、突如として社会主義が登場したのである。しかも、ヨーロッパの先進資本主義国のプロレタリアートを飛び越えて、「遅れたロシア」の労働者と農民が社会主義革命に勝利したのである。帝国主義のつぎに社会主義が訪れるのではない。帝国主義の時代とは社会主義の時代なのである。

ロシア革命は、帝国主義の時代に生きるすべての人々にとって社会主義は可能であることが明らかにした。そして世界は変わった。

(9) 新経済政策（ネップ）が社会主義の可能性を広げた

① プロレタリアートの独裁国家の役割

- ・ブルジョアジーを抑圧し、その抵抗を暴力で粉砕すること
 1. 銀行の国有化
 2. シンジケート（資本家の巨大独占団体）の国有化
 3. 営業の秘密の廃止
 4. 経営者の強制的なシンジケート化（強制的に団体に統合）
 5. 住民を強制的に消費組合に統合、統合の助成、その統制（*13）
 - 「監督と簿記掛」がいれば実行できると考えられていた
 - 実際には、「監督と簿記掛と銃殺隊」だった。

② 共産主義内の『左翼主義』小児病（1920年）

- ・社会主義政権を維持するために軌道修正とロシア革命の中間総括
- ・革命から3年がたった現時点で、ロシアはいまだに過渡期にある
 - 「階級を廃絶することは、地主と資本家を追い出すことだけを意味するものではない。小商品生産者を廃絶することも意味している」（*14）
 - 内戦下の戦時共産主義は、ブルジョアジーの抵抗を粉砕するための権力を小商品生産者としての農民を抑圧する権力に変えていた。この権力は小商品生産者（農民）を「小ブルジョア的な雰囲気」でプロレタリアートを墮落させ、ブルジョアジーを復活させるものだと決めつけていた（*15）

③ ネットの導入（1921～28年）

- ・農民たちを「長期にわたる、漸進的な、慎重な組織活動」によって改造し、再教育する（*16）
- ・社会主義政権下で市場経済を部分的に導入するこの政策は、決して短期的なものではなかったはずだが、レーニン死後、スターリンによって廃止される。
- ・ネットは短期間で終了したが、社会主義と市場経済が両立することを示した意義は大きい。それは社会主義の可能性を一挙に拡大した

③あらゆる社会主義経済は市場を適用している（ベクシャク）

- ・1970代の中頃、ポーランドの自主管理労働組合「連帯」の経済顧問をすることになるJ・ベクシャクは次のように述べている。

「私見によれば、あらゆる社会主義経済は計画経済でなければならない。同じく、あらゆる社会主義経済は、市場的あるいはパラメトリックな諸形態を何らかの形で実践的ににおいて適用しているし、また適用しなければならない。すなわち、管理は決して完全に指令的ではなく、そのうえ、分権度は国民経済の個々の部分で様々なのである」

「このようにパラメトリックなシステム(*17)として理解された『市場』は、最も広範囲に適用された場合でさえ、社会主義経済の計画性を脅かすことはない」（『経営する社会 ポーランド経済体制の理論分析』岩田昌征訳 東京大学出版会 1981年 p91～92）

つまり社会主義経済は、「監督と簿記掛」にだけに頼る必要はないし、中央集権的な計画経済（統制経済）だけで運営される必要もない。むしろ、市場を利用しなければ成り立たないし、企業の自主的な経営が尊重されるべきである。

分権的な経済運営を拡大することができるなら、いつでも可能なところから「社会主義への一歩」を踏み出してもよいことになる。

④ 公的所有の物神化（ジョン・E・ローマー）

アナリティカル・マルクス学派(*18)のジョン・E・ローマーは「社会主義者たちは公的所有を物神化してきた。公的所有が社会主義の必要条件とみなされてきたのである。しかしこの判断は間違った推論にもとづいている」（*19）という。彼の考える社会主義とは「自己実現と幸福」「政治的影響力」「社会的地位」の三つにおいて機会の均等が実現されている社会である(*20)。この観点から生産手段の所有権のどのような種類のものが最適なのかを考えてみるべきなのだ。

ローマーによれば、機会の均等を求める平等主義は、「人びとが好みにしたがって受け入れたり受け入れなかったりする、たんなる『価値判断』にとどまらないのであって、むしろ、どのような社会制度が正しいかについて、理性的で正直な人なら誰でも承認せざるをえない見解をなしている」（*21）

(10) 結語

ロシア革命が示したことは「帝国主義から社会主義へ」ではなく、「帝国主義と社会主義の分裂」だった。レーニンがいなければロシア 10 月革命はなかった。

しかし 10 月革命は、当事者たちの思惑をはるかに超えた歴史的イベントとなった。

・「この頭脳が、世界の後進地域と抑圧されていた人民を励まして資本の覇権に反対する行動に立ち上がらせるような、ラディカルな言葉を本当にどれだけ生み出したのか？」(張一兵*22)

→ ロシア革命は「世界の後進地域」の人びとに、「自分たちにも社会主義は可能であるという」という確信を与えた

・「ボルシェヴィキ革命は、わたくしの考えでは、フランス革命以降で最も重要な政治的イベントであった。というのは、それは 1789 年くらい初めて、何百万かあるいはおそらく何十億の人びとにとって、貪欲という規範よりむしろ平等という規範に基づく社会への夢を現実化したからである」(ローマー*23)

→ その「夢」は今もまったく色あせていない。それは資本主義がその姿を変えながら、長期にわたって存続しようとも、「社会主義はいつでも可能である」という強力なメッセージを発し続けている。いま世界の若者たちの間で、社会主義を望む声が急速に広がっている。英労働党左派のジェレミー・コービン、民主社会主義者バーニー・サンダース、フランス左翼党のジャン・リュック・メランションらを支持する若者たちをかき立てているのは、姿を消して久しい社会主義体制への幻想ではない。それはとは反対に、若者たちはその主張と行動によって、紋切り型で抽象的な死んだ「社会主義像」から社会主義そのものを解放しようとしている。

彼ら彼女らはこう呼びかけている。「現代世界において社会主義が現実のものとなるのかどうかは、ひとえに人々の選択にかかっているのだ」と。(了)

(*1) 大月版レーニン全集 21 巻「社会主義インタナショナルの現状と任務」p28

(*2) 張一平『レーニンへ帰れ』(中野英夫訳、世界書院 2016 年) p349

(*3) 張一平『前掲書』p420~422

(*4) F・ボルケナウ『世界共産党史』佐野・鈴木訳 合同出版 1968 年 p50

(*5) 新田滋「カウツキー超帝国主義論再考」『情況』2017 年秋号所収

(*6) ボルケナウ『前掲書』p51

(*7) 全集三八巻『哲学ノート』p182

(*8) カール・カウツキー『帝国主義論』波多野真訳 創元文庫 1953 年「ハイン

リッヒ・クノーの帝国主義論批判」P40)

(*9) ラーヤ・ドゥナエフスカヤ『疎外と革命ーマルクス主義の再建』三浦・対馬訳 現代思潮社 1964年 p230

(*10) カウツキー『前掲書』p43

(*11) 田村信一「シュルツェ・ゲーヴァニッツの社会政策思想」立教経済学研究 第48巻第3号 1995年

(*12) 全集 25巻「さしせまる破局、それとどうたたかうか」p385

(*13) 『前掲書』p355

(*14) 全集 31巻「共産主義内の『左翼主義』小児病」p29

(*15) 『前掲書』p30

(*16) 『前掲書』p29

(*17) 「パラメトリックなシステム」とは、絶えず変動する生産物の交換比率などを正規分布に近い形で調整する機能を持ったシステムを指しているのだろう

(*18) 「この学派は、方法論的個人主義に立った最大化行動の選択理論やそれにもとづく経済均衡の分析、さらにはゲームの理論やそれらをつうずる数理的な解析の技法などにわたり、新古典派経済学により開発されてきた分析的な手法を、マルクスによる経済学や社会理論のミクロ的基礎の解明にも有効に用いることができるし、またそうべきであるとしているところに方法論上の特徴がある。あわせて、非マルクス派の自由主義哲学の提起する自由、公正、分配の現代的理論にも正面からとりくむ姿勢をつらぬいている。こうした特色から、この学派にはまた、新古典派的マルクス学派、合理的選択マルクス学派、ゲームの理論的マルクス学派などの別称も与えられている。そこには、方法論的個人主義やそれにもとづく新古典派経済学に批判的に対峙し、社会関係の歴史的な構造や動態の論理を重視してきたマルクス学派の伝統にてらして、この学派むしろ反マルクス主義的ではないかという疑念ないし批判も含意されているとみてよい」(伊藤誠、『これからの社会主義 市場社会主義の可能性』訳者あとがき)

(*19) ジョン・E・ローマー『これからの社会主義 市場社会主義の可能性』伊藤誠訳 青木書店 1997年 p33

(*20) ローマー『前掲書』p23

(*21) ローマー『前掲書』p41

(*22) 張一平『前掲書』p39

(*23) ローマー『前掲書』p39